

# 思い出アーカイブ

仙台市広瀬図書館の思い出アーカイブは、周辺地域にまつわるテーマに関する「記憶」や「思い出」を、詩やエッセイとして

お寄せいただき、これをデジタルデータとして保存するものです。

お寄せいただいた作品については、明らかな誤字・脱字等を

修正した場合や、作品の一部が判読できず、適当と思われる文言で補った場合などを除き、改変を加えずに収載を行っております。

また、作品に添えてお名前をお寄せいただいた場合には、お名前をあわせて掲載をさせていただきます。この際、基本的には敬称を省略させていただきます。

カ  
ツ  
パ  
ダ  
川

\*\*\*

「広瀬の町を流れてる きれいな小川カッパダ川」 愛子小学校 山崎寛知君が作詞したカッパダ川の歌の一節である。

カッパダ川の名前は上町の一部地域で呼ばれている愛称である。諏訪神社に保管されている明治20年頃の絵図面には、現上愛子小学校南側（仙山線の南側）にある志田池・新志田池を水源として赤生木・大針・二岩・上町・下町の各行政区を流れ、名前を「千代老堀」と記載されている。

この川は近年まで上・下愛子地域の農業・生活・防火等の多様な目的の用水として活用され、「命の源」となっていた極めて重要な川であり、川幅も宮城県立図書館に保管されている明治10年後半に作成された、上・下愛子地区の絵図面には斉勝川よりも広い川幅で描かれている。ところで近年、カッパダ川流域の開発や上下水道の整備、田んぼ等の農業用地の縮小に伴い川の存在価値が低下しておりますが、川は魚や昆虫等の水生動植物の生存する場所であり、更には洪水等の災害防止等に欠くことのできない貴重な自然の財産である。

カッパダ川をこよなく愛し貴重な財産を守るために、私たちは「ひろせの底力」としての団体を結成し、地域の活性化とコミュニケーションの増進を図るための活動を展開中にカッパダ川の側に大型商業施設等が進出し、河川の暗渠化の計画が示されたことから、貴重な財産を我々の目に見える姿として残したいと思ひ、市役所や関係機関に働きかけたところ、市役所・ヨークベニマル・宮城大学・市民センター等の協力を得て、ヨークベニマル愛子店南側に枯山水のミニ公園「カッパダ川ひろば」が実現したのです。

「ひろせの底力」では皆様の心温まるご支援・ご協力に応えらるとともに、地域コミュニケーションを図るため、春の「鯉のぼり掲揚」・夏の「送りお盆と子供の花火大会」等の祭りを行っております。どなたも参加できますのでご来場下さい。お待ちしております。

作並温泉

## 舞台は作並温泉

私が若い時分は長男である意識が日常的にあった。それがいつからか忘れてしまい、年寄りになった今再現している。

次男が暮らす東京で二度、三男が理想という北海道でとそれぞれ兄弟会と称して小宴を張り、その都度長男としても成しを受けたことに関連していると思う。

今度は私が弟たちへお礼をするつもりでいたところ、三男の古希祝の話が持ち上った。これを機に二人にはその趣旨を伝え合わせて要望を聞くと、場所を私の住む仙台、兄弟だけではなく夫婦での参加、更には十月の八日か九日指定の注文である。この際兄らしく二つ返事で了承した。

決め手として仙台に近い鉄道沿線つづきの作並温泉で交渉の開始。十月八、九日は人気の日であること、私が企画しているアイデアの秘匿性から接衝は難航。だが近場の強みが味方して成立を見た。

案内状を送付してから至福にも似た境地で過した。にも拘わらず健康上の異変が発覚、知名の県一宮へ祈願したが手術が確定した。

九月五日手術、十一日退院、十月七日には完全寛解となった。翌八日の古希祝に劇的にも間に合い、自分の強運に打ち震えた。

無色透明な作並のお湯が三つある手術痕を浮ばせた。身を以って心情を吐露する時が来た。二人は黙って聞いていた。質問もせず。

宴席は私の話題で持ち切りなので、早目に二次会へと誘導した。会場はカラオケルーム、全員が入室のタイミングでバイオリンの音色が流れた。「G線上のアリア」の調べに一同は驚嘆、やがて寛ぎ陶然とした。

奏者はニューヨークジュリアード音楽院卒のプロ。ジャンルを越えた厳選三十曲から一人二曲をリクエストの仕組み。

これらの紹介、案内をする自分は、又しても長男役を好演してしまったかと思った。

(完)

\*\*\*

私が初めて作並温泉を訪れたのは、今から半世紀以上も前、確か私が大学四年生に進級した昭和三十四年秋頃の事で御座います。

私は大学入学と同時に他県から仙台に参りまして、某電力会社が運営する学生寮で生活しておったので御座います。私は工学部生で御座いましたが、当時は卒業時の就職活動は殆ど必要なく、毎日が勉強一筋の恵まれた時代で御座いました。そんな生活の中で、私は一つだけ夢があつたので御座います。

それは、仙台に居る間に、敬愛する俳人芭蕉翁が訪れたという立石寺（山寺）を尋ねることで御座いました。実は高校時代に、私は芭蕉翁の紀行文である『奥の細道』に親しんでおったので御座います。

芭蕉翁が弟子の曾良を伴って旅をした時代は、殆ど徒歩だけで移動したこと  
は人々の知る処で御座いますが、私も芭蕉翁を見習って仙台から山形へは徒歩  
で出向くことを考えたので御座います。しかし、一日で山寺に到達する自信が  
なく、途中で一泊することに致したので御座います。幸い、某電力会社の運営  
する保養所が作並温泉の外れに在り、寮生でも其処を利用出来ることが分かり  
ましたので初日は作並を目指して仙台を出立致したので御座います。私が作並  
温泉を初めて知ったのは実にその当方で御座いました。

市内元寺小路に在った学生寮を何時頃に発つたのか、今では思い出せません  
が、私が作並に入った時は日がとっぷりと暮れて、保養所の入り口を示す看板  
照明が道端で明るく灯っておったので御座います。その時期は保養所が閑散と  
しておつて、私は風呂を独り占めして温泉浴を楽しんだので御座います。

縁があつて私は現在仙台に住んでおりますので、作並温泉を時々訪ねるので  
御座いますが、残念ながら、学生の頃に私が一泊した某電力会社の保養所は既  
になく、道端の風景も大きく変わり、保養所があつた場所すら私は特定できず  
におる有様で御座います。

# 定義山

## 定義山の思い出

わたしは、定義山であぶらあげを4才のころにはじめて食べました。目の前であぶらあげがつけられていたので秋にいつてすぐあたたくてすぐく体の中と心がほかほかしたきがしました。冬にもいくこともあったけど夏に毎年行っていました。すぐく大きな花火が毎年あがっていてとてもすてきでした。お母さんとお父さんと3人でいったときも、屋たいがいっぱいあってすぐくはしゃいで楽しんでいました。毎年見に行つて歌も歌う人もいるのでいっぱい人がくるのですごくもりあがつたのしかつたです。

今年は天気が悪かつたのでいけなかつたけど来年はいきたいです。

仙  
山  
線

\*\*\*

小学生の頃北山に住んでいた。今考えると北山駅に続く跨線橋の橋桁げたに掴まり、上を汽車が通過するのを肝試しとしたり、また昭和天皇お召列車が仙山線を通過するのを沿線で旗や手を振って迎えた事もあった。その後 架線工事が始まり電車が走った。当時の電車は赤く運転窓が高く鉄格子が施されていた記憶がある。

私の就職先は日立製作所で、勤務工場では購入品検査や品質管理の仕事をしてきた。会社はJRの地上変電設備や車両トランスも手掛けており、今から四十年前頃、購入品の鉄道車両部品があり品質管理の為に出張をする事があった。上司と二人日立を出て東京から新幹線で岡山まで、開通直後の瀬戸大橋と高松を經由して、愛媛県まで延々と十時間余り、品質管理スケジュールの打合わせも終わり、話題もなくお尻は痛くなる難行苦行で松山駅に、翌日 当該工場での作業後雑談で、応対された技術顧問はJR仙台からの転属で仕事は仙山線の電化事業を担当した人で、電車開発時の車体や車両トランス、仙山線電化の話をした。

仙台出身の私は「電化したのは確か昭和33年でしたか」と応答し、遠い四国で仙山線の話をした記憶がある。加えて私の勤務先は車両用トランスを部品として制作し艤装工場に送り電車に搭載している。この電車が仙山線に送られ試運転や運転継続されてる。

その後、家庭の事情により仙台に転勤し白沢に住んでいるが、白沢駅に回送電車のいる時、線路から車両下をのぞき込んでいると、電車運転手に「何かあったか」と問われ「何もありません、車両搭載のトランスやリアクトルの製造年が、私が勤務していた頃の物か確信していただけです」と話した事があった。又 白沢駅で荷卸しされた変圧器が、前後に運転席のある台車に乗せられ、西仙台変電所まで運ばれた変圧器も、私が転勤前に資材担当として関わったものである。その仙山線で今孫が通学している。

## 仙山線の魅力

宮城、山形の両県庁所在地を結ぶJR仙山線(58km)。作並・山寺の転車台や面白山トンネル、第二広瀬川橋梁(熊ヶ根鉄橋)など鉄道施設群が土木学会の2014年度選奨土木遺産に認定された。いま交流電化発祥の地である仙山線が再評価されてきている。昭和12(1937)年、仙山線は面白トンネルを挟む作並―山寺間の開通で全線が繋がった。新区間は勾配がきつく、トンネルは5、361mと長い。乗客及び蒸気機関士の煙害にも配慮して、直流の電気機関車が導入された。仙台―作並、山寺―山形間は従来通り蒸気機関車が走り、作並、山寺の転車台(ターニングテーブル)で向きを変えた。昭和29(1954)年、国内初となる交流電化試験が仙山線で始まり、昭和32(1957)年9月に仙台―作並間で交流電化の営業運転が実現した。この試験で得られた技術結果が鉄道高速化への道を開き、東海道新幹線開業の基礎となった。今や50周年を超えてリニヤモーターカーへと展開する。

小生の所属する市民グループ「仙山線の歴史を辿る会」は仙台から羽前千歳までの踏切47カ所を1年かけ歩いて全て踏破した。

その中に『宮城寮前踏切』という名の踏切がある。宮城県立こども病院、宮城広瀬高校、中小企業大学校へ行くところの踏切である。ここに昭和10(1935)年、農業を志す日本の農民研修施設の中心的存在として宮城農学寮が作られた。何と80歳の高齢で世界最高峰のエベレストに果敢に挑戦して登頂に成功したプロスキーヤー三浦雄一郎氏。その父である三浦敬三氏が第三代目の寮長として昭和17(1942)年から昭和19年まで在職されていた。長男の雄一郎氏は約半年間広瀬小学校に通学していたそうだ。

彼は、小学生の頃体が弱かったが、近くの落合4丁目の川に泳ぎに行くこともあった。また小さい時からスキーをしていたが、今は止まらない駅、仙山線八ツ森駅(平成26年3月14日廃止)に町営の八森スキー場があったがそこにもよく行ったそうだ。

(次頁につづく)

もう1ヶ所第二広瀬川橋梁(熊ヶ根鉄橋)を紹介したい。

この熊ヶ根鉄橋は昭和3(1928)年に竣工。広瀬川の渓谷が狭まった位置に架設され、橋脚が高くなるが長さは最短になり、建設費用やメンテナンス、前後の線路建設などが考慮されたものである。完成当時は九州の白川橋梁、山陰本線の余部橋梁に次ぐ日本第3位の高さを誇っていた。長さは134.4m、高さ51mのトレスル(細い鉄骨を末広りの櫓のように組み合わせて支柱とする橋梁)3基で組み上げられた。現在1、2位の橋梁が廃線となったので今や熊ヶ根鉄橋が高さにおいて日本一のトレスル橋である。

仙山線沿線には、この他にも愛子駅には仙台市天文台、秋保温泉、熊ヶ根駅には三角揚げで知られる定義山、作並駅には転車台、そしてNHK連続テレビ小説「マッサン」でブームのニッカウキスキーの宮城峡蒸留所、鳳鳴四十八滝、奥新川駅には奥新川変電所跡、鉄道神社、面白山高原駅には仙山隧道(面白山トンネル)、山寺駅には松尾芭蕉、曾良の二人が旅した山寺ほか見どころがいっぱいである。是非訪れて頂きたいスポット満載である。

(都木重之／2015年12月収載)

仙山線沿線、「宮城峡から鳳鳴四十八滝」を吟行

ニツカウキスキー仙台工場は「宮城峡」にあり、ここから四十八号線「鳳鳴四十八滝」に至るまでのコースを吟行で紹介したい。

土曜日・日曜日・祝日に限り、ニツカウキスキー仙台工場はシャトルバスを、作並駅に運行している。十月の第二土曜日、これを利用して吟行に出かけた。乗って数分ほどで広瀬川のニツカ橋を渡り終えると、左がニツカウキスキー仙台工場の門である。ニツカウキスキー宮城峡蒸留所の看板もある。看板に従い、右に工場建物、左に広瀬川を見ながら数百メートルほど行くと新川に突き当たる。

ここを右に回り建物に沿って行くとヨーロッパ風の赤レンガ造りの大きな建物が並ぶ。素敵な工場の一画にある「ご見学受付」の前で下車する。

地形をそのままに生かした赤レンガ造りの建物群の工場は、山々に囲まれ、清流の広瀬川と新川に挟まれた合流地点になっており、自然の起伏を生かしていることが判る。

ニツカウキスキー北海道余市の工場が、過去にNHKの連続ドラマ小説「マッサン」で注目を浴び、二つの工場しかない仙台工場もすっかり馴染深くなっている。

そんなわけで、今でも朝早くからの見学者が絶えることがないという。まさに見学者で賑わう工場になっているのだ。今までに何回か来客の見学に使ったことがあるので、大体の様子は判っている。

工場見学者は「ご見学受付」の待合室で記帳、説明を受けて案内される。見学した後はゲストハウスでウキスキーの試飲を楽しみ、また購入もできる。

敷地の中ほどにかなり大きな池がある。水面には落葉が浮かび、周りの木々の影を映し、白鳥二羽と十数羽の鴨たちがいる。見るからにのんびりした光景である。

歩いてみて気付くことは、工場敷地内にある杉、ブナ、桜、松、等々の樹木の幹がことごとく黒くなっていることだ。不思議に思い受付で聞いてみた。この現象はアルコールを好む菌が付着して出来るものだという。構内のすべての樹木が黒くなっているのだ。

ここ宮城峡で句を詠む。

### 宮城峡落葉に滲みるピートの香

#### 黒い木々桜紅葉の池の端

ウキスキーのブランド名になっている「宮城峡」とは、どこの川の峡谷かと思ひ聞いてみた。しかし自分の思いとは違っていた。

山々に囲まれ、清らかな川に挟まれたこの工場一帯が宮城峡であるということだった。川霧が出る広瀬川と新川、その清流が合流する一帯の工場の敷地が「宮城峡」ということになる。なるほどと理解した。

宮城峡から鳳鳴四十八滝まで歩いて、判ったことは以下の通りである。

広瀬川を右にみて宮城峡から鳳鳴四十八滝に至る道半ばを過ぎると、川は道に接近してきて水音が高くなる。流れが速く音が谷底から聞こえて来るのだ。広瀬川はかなり深い崖下を流れているのが分る。車からの目線では見ることは出来ない急峻な峡谷なのだ。歩いてみて初めて判る景色である。

この場所は、春は萌黄、夏は緑、秋は紅葉、冬は雪渓、四季折々の景色が堪能できるのである。暫く歩くと右側にちょっとした広い駐車場があり、その奥に鳳鳴四十八滝の案内看板が見える。路から看板に従い歩くと眼下に滝が見渡せる場所に至る。ここが高台になっているのである。この高台にはかなりの広さで、フォトポイントがあり巡る事が出来る。眼下には変化に富んだいろいろな滝を見ることが出来る。周りは柵で囲ってあり安全であるが、下は切り岸であり、滝が連続しているのがよく判る。

高台には不動明王が祀られている。滝を見下ろす近くに位置し、あたり一帯は荘厳な雰囲気漂っている。

幾重にも重なり流れ落ちる水は青みがかかっており、周囲の美しい景観と水面のコントラストは絶景。重なり合い大小様々の滝から個性豊かな音の調べを奏でているのに出会うことが出来る。

鳳鳴の名の由来は、この幾つもの滝が重なり、音色が響き合い織りなす不思議な旋律を聞いた「いにしえ」の人々は、伝説の鳥、鳳凰の鳴く声に似ていることからいつしか、このあたりの滝を「鳳鳴四十八滝」（ほうめいしじゅうはちたき）と呼ぶようになったと言われている。

仙台の知られざる滝の一つでしょうか。

秋の吟行であったので、滝の兩岸には紅葉した木々が茂り、その中を流れる水は重なり合う滝となり心地よい音をたてている。残念なことに滝つぼの側まで行くことは出来ない。遠くから見物することになっており、白い飛沫を上げ滝つぼに落ちる姿は格別の美しさで、見る人の心に響き感動する。いつまでも眺めていたいと思う景色である。

### 紅葉葉を流して響く滝の音

高台から眺めると上流を階段状の幾つもの滝。色づいた木々の間を白い飛沫をあげて豪快に落ちる流れ、その背景には鎌倉山が鎮座して一幅の絵を眺めているようだ。景色としても一級品である。

傍に蕎麦店「どうだんの里」があり、食事が出来る。店内は清潔感があり、落ち着いた雰囲気である。窓からは移り変わる作並の山々の季節を感じ、美味しい蕎麦を堪能できる。

美味なので女将に山形の蕎麦かと聞くと、なんと「作並の蕎麦」という。ご当地の蕎麦なのだそうだ。

新蕎麦を食した後の一句。

### 鳳鳴の四十八滝はしり蕎麦

吟行を終え、帰りは店の傍のバス停から愛子に向かった。

## 1 小学生の頃

敗戦後間もなくの昭和20年代、私が小学生の頃どこの家庭も厳しい生活を余儀なくされていた。私の家もその日に食べるものが精一杯の生活をしていたので、家庭に時計を持つ家も少なく汽車の運行時間で時を感知していた。低学年の頃当時の汽車は一日上り下り合わせて14本（現在は108本）1時間に1本程度であるから仙山線の汽車の音を聞いて「何時だ」と遊びをやめ帰宅していた。特に当時は踏切に警報機や遮断機が無かったので、機関車はやたらと警笛を鳴らして運行していたので時間を知るのには丁度よかった。

また、学校の帰り道に時々線路を歩いたが、低学年時には枕木と枕木の間幅が広く大またで歩かなければならず必死になって歩いたものである。

## 2 中学生の頃

広瀬中学校の学区は広く、奥新川から郷六まで、この間の駅は奥新川・作並・熊ヶ根・白沢・愛子・落合の6駅で、全国の市町村で一つの村へ国鉄の駅が6駅あるのは極めて珍しいと話題になっていた。生徒は各駅から仙山線を利用し中学校に通学しており、授業時間は汽車の時刻に合わせ編成していた。上りの汽車を利用する生徒は午前7時30分頃に登校し（次の汽車は午前10時頃）帰りの下り汽車を利用する生徒は午後1時30分頃（次の汽車は午後5時頃）の汽車で通学していたので、始業は午前8時00分、終業は午後1時30分と記憶している。

私が広瀬中学校に在籍していた昭和29年（1954年）交流電化の試運転がはじまった。授業中にぼんやりと教室の窓から試験運転の様子をながめ先生から注意を受けたこともあった。電気機関車は日立・三菱・東芝製の3両で、エンジンに塗られ時には機関車を2両連結したり試験車を牽引したり興味的であった。

（次頁につづく）

### 3 高校生の頃

昭和33年私も高校生になり交流電車に牽引された汽車を利用し通学した。その頃東北本線や常磐線は蒸気機関、同級生の中には石炭の煤でワイシャツの襟や袖を汚す者もいた。幸い私は電気機関車に牽引された列車で、ワイシャツを煤で汚すことなく快適に通学していた。

しかし時には電気機関車が点検や故障等で都合がつかなくなると、時々蒸気機関車で牽引することがあった。蒸気機関車は牽引力が弱く雨や雪で線路が濡れると、蒸気機関車に備えつけられている砂を線路上に撒き、喘ぎあえぎ落合々山屋敷トンネル間の急坂を登っていたが、時には現葛岡駅付近で登りきれなくなり、そのまま落合駅まで後退、今度は勢いをつけて坂を上ったこと何回もあった。またいつも快適な電気機関車に牽引されていることになれていたため、上記機関車に牽引されていることを忘れ、窓を開放しトンネルに入ると突然煙が車内に入り込み、煙いのと喉がいがらっぽいのに往生したものである。

また車内には山形からの担ぎ屋さんが6両編成中の2車両に集団で乗っており、大きな担ぎ籠には、朝は野菜帰りは魚等の海産物で、車内は積載物と煙草（当時は車内での煙草を吸うことが許されていた）の匂いが充満しており、その車両を避けて乗車していた人も多かった。

## 仙山線よありがとう

私が愛子に越して来たのは四十五年程前のことで、電車は一時間一本でとても通勤に使えるものではありませんでした。ただそこにレールが敷いてあったという状態でした。改札は北口だけで淋しいものでした。

3・11の地震の時は、電車が20日間も踏切を占拠していました。

仙山線が宮城・山形全線開通したのが、昭和12年。その年に生れた私はこれも何かの縁と思い、昨年の土木学会推奨の土木遺産認定を記念して開かれた、作並街道フォーラムに参加致しました。加藤栄一先生、平川新先生等のご努力により、昔の貴重な作並駅の汽関車の転車台等が日の目をみるようになりました。又、作並駅の交流電化発祥の碑ももっと知られて良いことと思います。

私達は地元の良きものを発掘し、すばらしい地域であることを自信をもって発信すべきと思います。

私の健康は歩く事にこだわっています。栗生が開発される前のたんぼをダイエットの為に良く散歩していました。10年程前、ある人から、散歩ではダイエットの役に立たない、自分の生活リズムの中に歩くことを取り入れよと云われ、これを実践しようと、車での通勤から電車の通勤に変えました。自宅から落合駅まで歩いて20分、電車で15分、駅から職場まで20分又歩きます。仙山線を利用して10年歩き続けております。その間65才と72才の時に富士登山をして2回ともご来光を拝むことが出来ました。今は北山駅で降り、山中腹にある事務所まで歩いて一年になります。足腰が強くなりました。昨年まで冬は湯タンポを入れ寝ていましたが、今年は入れておりません。これも仙山線のお陰です。今は、朝は15分に一本の電車がありずい分便利になりました。落合駅も仙山線では一番大きく、便利で美しい駅になりました。それを利用出来る一人として『仙山線本当にありがとう』です。

## 仙山線の思い出

平成七年に愛子に居を構えてから二十年が経とうとしている。マイカーを所有しておらず、利用する交通機関は仙山線を走る列車である。乗り降りする駅は愛子駅。

この愛子駅が平成十三年十二月七日、にわかには日本中の耳目を集めたことがある。皇太子夫妻の間に誕生した子が「愛子」様と名付けられるやいなや愛子駅に人が押し寄せ、当日の日付入り切符を買い求めたのである。駅前には長蛇の列、あんなに賑わいを見せた愛子駅は後にも先にもないと思う。

最初から「愛子」を「あやし」と読める人は数少ない。子を愛おしむのなら、親を愛おしむ駅名があってもよさそうだが、これがあった。北海道の室蘭本線にある「母恋」という駅だ。めずらしい駅名を探すのもなかなか面白い。そういえば「面白山」駅も仙山線にあり、かつては「面白山仮乗降場」の駅名で日本一長い駅名だったようだ。

愛子駅を起点に勤務先が仙台市内にあったとき、山形市内にあったとき、そして仕事をリタイアした今でも仙山線に乗り続けているのだから、生涯で一番乗っているJR線が仙山線ということになる。仙山線の魅力はといえば、めぐる季節の移ろいが車窓から見事にとらえられるということだろう。

とりわけ山形に通勤してきたときにはピンク色の桜が奏でる春爛漫、初夏の陽光に息づく樹や花、パッチワークのようなあでやかな紅葉、冬のモノクロ世界の幽玄な山寺、乗るほどにその魅力は尽きず、居ながらにして違う季節への旅を楽しませてくれたものだ。

人生という名の列車もたそがれに差しかかってきた。そんな感慨を胸に、眺める仙山線からの季節の移ろいはどんなふうに映るのだろう。秋の空に舞う枯葉に、わが身を重ねたりするのだろうか……。それもまた自然の恵み、人生を感じさせてくれる仙山線に感謝だ。

蕃山

## 蕃山を歩く

愛子に居を構えて20年になる。折に触れ周りの環境の変化に気づかされ、故郷のような感じになってきた。わが家の二階の窓から蕃山の頂上が見える。その蕃山に文学碑があるという。前から一度行ってみたいと思っていたので、満を持し足に向けてみた。

古刹大梅寺口から鬱蒼とした杉の中の石段を登ると、「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」で始まる夏目漱石の「草枕」の一節が刻まれた文学碑を見つけた。

人は誰しも人間関係のしがらみで生き、ときにその人間関係で悩む。「智に働けば角が立つ…」は、そうした人の世の常なる感情のもつれを言い得て妙の言葉だ。この言葉を反芻し、悩んでいるのは自分一人ではないと慰められ、気を鎮める人が少なくないと思う。

「草枕」を読んだのは高校生のころ。なぜか冒頭の書き出しはよく覚えていた。奇しくも身近に、その言葉が刻まれた文学碑があったのだ。これも何かの縁、腰を据えじっくり再読してみたい思いに駆られた。

帰り、愛子バイパス沿いの西館跡に寄ってみた。政宗の長女五郎八姫（いろはひめ）は、夫の松平忠輝が改易・配流されると、仙台城に戻った。キリシタンだった五郎八姫は、静かに信仰の生活ができる栗生に別御殿を構えた。それが西館。「五郎八姫物語」（新しい杜の都づくり青葉区協議会）には、栗生の四季折々の自然や、五郎八姫の「人に求めず、人に与えよ」の生活の様子が描かれている。

本の舞台となった場所を訪ね、その場所に立つと、臨場感が湧きあがり、改めて味わい深く感じられるものだ。わずか半日の行程だったが、文学・歴史を感じさせてくれた蕃山を振り返りながら「山路を登りながら…」と口ずさみ、家路についた。

## 蕃山の麓に暮らして

蕃山の麓にある団地に暮らして三十年半ばになる。仙台転勤の際に、子供たちをのんびりした環境で育てたいと選んだもの。引越してエアコンの設置をお願いした近所の電気屋さんが、ここは「仙台の軽井沢」ですと自慢。実際暮らして見ると夏は市内より涼しく、冬は公園でスキーやそり遊びが出来るほど。

昔ここには「西花苑遊園地」があり、学生時代に路面電車とバスを乗り継ぎ来たことがある。当時としては珍しい熱帯植物園や遊戯施設があつたが、転居時にはミツバチ食堂の廃墟があるだけでその面影はなかった。

蕃山一帯はモミ・イヌブナの原生林が残された自然豊かな里山。都市近郊の地域としては貴重な存在で、麓の小学校では遠足の山として親しまれている。私が蕃山の魅力をより強く感じたのは、術後の妻と早春の登山道を歩いたのがきっかけ。厳しい冬を過ごしたカタクリ、ショウジョウバカマ、イワウチワ等の花が日を追うごとに咲き始める姿に大いに励まされる。その後頻繁に蕃山を歩くことになり、新緑に咲き乱れる様々なツツジの花、生命力あふれる野鳥の囀り、錦の様な秋の紅葉等に身も心も癒される。

平成に入り、リゾート開発計画の対象になるが、幸い多くの人々の努力で貴重な自然が守られる。また平成九年には、将来残すべき自然として「蕃山特別緑地保全地区」に指定されたことは実に喜ばしい。

その後平成二三年東日本大震災が発生し、麓の地域も大きな被害を受ける。今も余震の不安もあるが、歩くたびに新しい発見のある蕃山は、心のよりどころとして欠かせない存在となっている。残念なことに昨年、震災復旧に乗じた違法伐採が報じられたが、貴重な自然の宝物を子子孫孫残したいと強く思う今日この頃である。

広瀬川

## 「開成橋」

広瀬川に架かる開成橋について私が知るのは現橋を含む三代の橋だけでありそれ以前の橋については不明である。最初の橋は昭和三〇年（一九五五）まで使用された吊り橋で架橋年月は不明だが昭和三〇年以前生まれの人々は利用していた事になり知る人は多い。その利用は広瀬川の川遊びにまで及び吊り橋から川に飛び込んだり、水泳ぎの場所取りで芋沢側と愛子や他の地区側とで石を投げ合いの合戦や罵詈雑言の喧嘩も多かったと聞いた。

また現在のような水着などではなく女の人はブルマーをはいて泳いだがウエストの緩いブルマーを着けた女性が吊橋から飛込み、ブルマーが脱げて男達が喜こんだという話も聞いた。私の近所の奥さんは、娘時代に橋を渡った時悪童達が橋を揺らし、怖くて橋に腹這いになり揺れの収まるのを待ったと話し、旦那さんは台風や大雨後に父親と吊橋に行き破損箇所の修理をしていたと話していた。

この橋の名は通称「郵便橋」と呼ばれ愛子郵便局と大沢郵便局の連絡に多用されたのであろう。様々の思い出を残したこの吊り橋も昭和三〇年に使命を終えたが吊橋の支柱が現在の橋の上流三五〇米、広瀬川北岸に残っているが南岸には無い。

次の新橋は長さ一〇二・六四米、巾四・五米のコンクリート橋で、「開成橋」と名付けられた。これは昭和三〇年に広瀬村と芋沢村が合併し村名を宮城村としたので、共に開かれた村になろうと「開成橋」と名付けという。昭和三〇年開通したが時代の変化は早く、車両の大型化や通行量の増加に対応できずに平成十三年（二〇〇一）まで四六年間の使用でその使命を終えた。平成十三年四月、長さ一四六米、巾一四・八米で両側に歩道の付いた豪壮な開成橋が誕生となる。

橋上に水面を眺め、川風を楽しむも一興

## 「湯渡戸橋」

作並の広瀬川に架かる「湯渡戸橋」は仙台市と山形を結ぶ大動脈。国道四八号線を仙台から作並温泉街に入る直前を広瀬川が横切って流れている。ここに現在の橋が架けられたのは、昭和二十八年（一九五三）であった。

長さ九七米、巾五・五米、高さ二九米で、戦後の米軍大型車輛や一般車輛の増加に対応したものであった。

旧橋は「岩田堂橋」となっていたが、この橋名について、仙台の著名な郷土史家三原良吉氏の書かれた「広瀬川の歴史と伝説」にこんなことが書いてある。

宮城村の村長庄子長吉氏と作並に同行した際に、温泉の南入口に橋があり、欄干に「岩田堂橋」と記されているのでその由来を庄子氏に尋ねたがわからないという。そこで説明した、イタワドウを「イ」と「ワタドウ」に分けて、「イ」は「お湯」「ワタドウ」は「渡戸」で、谷の渡河点であり、正しくは「湯渡戸橋」であると。村長もなるほどと合点し、後に橋を架け替えた時に初めて「湯渡戸橋」と名称を改めたとある。

平成二十九年（二〇一七）三月、知人と三名で旧橋「岩田堂橋」を訪ねたが橋名板は外されて橋名を確かめることはできなかったが、当時を知る私は「岩田堂橋」を記憶しているし、地元作並の人達の証言もあるから「岩田堂橋」であった事は間違いない。

旧橋は現橋の下流約二十米にあり高さは水面から約十五米ある。

旧橋上に立てば名湯「作並温泉」の入口にふさわしく、鉄骨アーチ式の橋脚で広瀬川にお似合の粹と風情を感じさせる橋であった。

そして、安永元年（一七七二）に書かれた「封内風土記」を調べると昔の橋名は現橋と同名の「湯渡戸橋」とあった。

\*\*\*

広瀬川を最初に見た時の記憶は、今でも強く残っている。私の家族は昭和25年、私が3歳の時に、母の実家があった現川崎町から仙台市内へ引越してきた。その時にトラックの窓から目にした広瀬川のとうとうと流れる姿が、幼かった私の目に、強く焼き付いたらしく、今でも覚えているのだ。丁度広瀬橋から上流を眺めた風景がそれである。

以来、私は仙台で育ち、就職後に一時期東京に住んでいたのを除けば、仙台に居た。従って、私にとって山は青葉山、川は広瀬川なのだ。東京勤務の頃も、盆と正月に仙台に帰省する毎に、新幹線の車窓から見る広瀬川の風景は、幼かったあの時に見たものと重なり、「あゝ仙台に帰ってきたんだ!」との感慨に浸ったものであった。

そんな私なので、小さい頃から広瀬川には友達とよく遊びに出掛けた。日が暮れるまで仲ノ瀬橋付近の浅瀬で、魚を追いかけたものだった。その後中学へ進むと、広瀬川は夏の水泳場となった。当時殆どどの中学校にはプールが無く、西公園の市民プールもできる前だったので、比較的近くで泳げる所は広瀬川しか無かったのだ。現在、芋煮会で賑わう牛越橋の少し上流の賢渚という所が、指定された水泳場だった。当時はまだ市電が街を走っており、全区間片道13円、往復25円の料金だった。私は弟を連れて母から25円ずつもらって、電車で広瀬川に行っていたが、そのうち悪知恵が働いて、帰りは電車に乗らずに歩くことで13円を浮かし、そのお金で一杯10円だったかき氷を食べて帰るようになった。ある日の帰り、弟が疲れて歩けないと言う。仕方なく弟だけ電車に乗せ、私だけがかき氷を食べて何食わぬ顔で家に帰った。当然弟の方がかなり先に家へ着いていたので、独りで氷を食べてきたのがバレて、母にきつく叱られた。

そんな思い出もある広瀬川だが、今でも花壇周辺の河岸段丘を眺めると、やはり風情豊かな川だなアと、つくづく思うのである。

## 人生をつなぐ広瀬川

昨年、高齢者の仲間入りをした。老境を強く感じはしないが、明らかに老いの坂道を登り始め、人生を振り返ることが多くなった。

二〇〇三〇代、埼玉県越谷市の北越谷に住んだ。すぐ近くに元荒川という川が流れていた。その土手沿いには桜並木が列をなし、桜吹雪の舞う中をジョギングしながら春爛漫を感じ、夏には蝉しぐれに包まれながらウトウト眠気を催した。

四〇代、札幌へ転勤した。宿舎から自転車を数分ごと中島公園にたどり着く。近くに豊平川があり、秋ともなると鮭が上って来るのを目にし、北海道の原風景を見たような気分にかられた。

五〇代、旭川へ転勤になったときには近くを石狩川が流れ、厳寒に氷の張った石狩川を目の当たりにした。さらに埼玉県鴻巣市へ転勤した。日本一の栽培面積の広がるポピー畑があり、そこは荒川の河川敷だった。

意識して川の近くに住んだわけではないが、住んでいた近くには不思議と川があった。そして今、自宅のすぐ目の前には広瀬川が流れている。川の規模は大きくも小さくもない。周りには樹木が生い茂り、自然の表情を楽しむことができる。

ここにはまた川の流れのせせらぎと、小鳥のさえずりがある。カタチのない音なのだが、耳に心地よく響いてくる。さしずめこちらは「音の風景」といったところだろうか。感性を研ぎ澄ましたら、息づく自然にもっと気づかされるかもしれない。散歩の楽しみにはずみがつきそうだ。

「行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず」。人生はよく川に例えられるが、想い起こされる川風景は人生をつないでいるようだ。流れ流れて人生は今、広瀬川の岸辺にいる。ぼんやり川の流れを眺めていると、時の流れに包み込まれ、凶らずも懐古の情が湧いてくる。

その他

## 愛子の自転車屋

オンボロ自転車がパンクしてしまい、近くの自転車屋に修理を頼みに行った。店番は老婆、いや「ばあさん」と呼ぶことにしよう。修理するのは、ばあさんの息子。自転車を預け、家に戻ろうとすると、ばあさんが「ここに来さい」と私を手招きした。丸椅子に腰かけると、急須にポットの湯を注ぎ、お茶を私の前に差し出し、お喋りが始まった。

自転車屋のまわりの空き地は整地され、住宅がどんどん建っている。

「ずいぶんまわりに家が建ってきたね」

「昭和25(1950)年に、ここさ来たんだけどもお、まわりはなんにもねえ、のんびりしていたのっしや。なじよして、こったら(家)建つんだっぺ…、なんとかしてけさい」

「でも、人が増えるので自転車屋も儲かるのでは？」

「なあにはあー、大型の店ができて、安く売るもんだからおれだちみでいな、小ちやな店は儲かるわけねえっぺ」

店の奥の方に空き地が見える。たぶん所有地に違いない。

「ねえ、奥の空き地を寝せておかないで、いっちょよう金儲けでもやってみたらどう？」

「なにのんきなことを語ってんだっぺ、そつたら金儲け、自転車屋には向がねっぺっっちゃ」

「どうして？」

「まだまだ、〃じてんしゃそうぎよう〃になっぺえ」

「えっ、自転車操業って、そこから来ているんだ」

「んだっぺっっちゃ。わがったな」

抜けば玉散る機知のひらめき、思わず「座布団3枚！」と口を衝いて出、笑いこけてしまった。聞いて驚くことなかれ、実はこのばあさん、御年90歳に手が届こうとしているのだ。笑いの灯をともしことで、健康を保っているのでは勘繰ったほどだ。

(次頁につづく)

お茶を注ぎ足しながら、「まあ、なんすつ。へ…、こうやってはあ、喋るのも少なくなってきたのっしや」とばあさんの口から漏れ、こんな話もしてくれた。それは自転車の修理にやって来た父と子の話だ。昔は修理している合間に父と子、ばあさんの三つ巴でよくお喋りしたものだという。ところが、今はどうか。子どもは手にしているゲームに熱中し、かたわらで父はそれをじっと見つめ、ゲームの行方を追うばかり。話しかけようとしても取りつく島がないのだそう。だ。「これも時代です。へっか？」と、薄れゆく父子関係、家族関係の気配を感じているようだった。

「昭和も遠い日に感じられてくるねえ」と話すと、「んだ、そのとおりですがね」とうなづく。昭和の時代を共有しているとはいえ、私とは親子ほどの年齢差がある。しかし、時代に追いつこうと努力しても新しい世になじみ切れない部分が多くなる気持ちと、昭和の時代を忘れまいとする気持ちが重なり合ったのか、お喋りにはずみがついた。

ふらつと立ち寄り、お茶を啜りながらお喋りを楽しむ。かつて、家の縁側でよく見かけた光景だ。名付けて「縁側サロン」とでも呼ぼうか。ばあさんの自転車屋には、縁側サロンの残り香が漂っているようだ。帰るころにはお茶腹になつてしまい「えい！どっこいしよう」腰を上げるのがしんどい。その仕事表情を見て苦笑いするばあさん。

「ばあさん」と呼んできたが、かくいう私は「じいさん」だった。すっかり忘れていた。なおった自転車を漕ぎ、家に帰る途中、お喋りのやり取りが思い起こされ、顔が自然にゆるんできた。なにか心地よい気持ちにかられ、夕食前のビールがいつにもましてうまい。願わくはこうして笑える出来事が多くあって欲しいものだ。

平成29(2017)年1月現在、愛子の街には自転車屋がばあさんの一軒しかない。縁側サロンの残り香がいつまでも漂っていて欲しいと願う。

## 愛子に在る図書館

2011年3月11日午後2時46分、東日本大震災が起きた。この日このとき、自分はどこでなにをしていたか、覚えていない東北人はいないと思う。私はいえ、さいたま新都心に在るビルの21階にいた。一息つこうとしていたそのとき、壁がきしみ、部屋がおもちゃ箱のように揺れだした。思わずしやがみこみ、机の脚にしがみついた。「ビルが倒れる…、これでおしまいか」と頭をよぎった。地震でこんな怖い思いをしたのは生まれて始めてのこと、「生きた心地がしない」とはこんなときに使うのだろう。

この日、広瀬図書館と思われる図書館を、ある若い女性が訪ねている。その人物とは直木賞作家乃南アサの小説に登場する女主人公芭子(はこ)である。「いちばん長い夜に」(新潮社)という作品に収められている「その日にかぎって」に登場するのだが、前科持ちの芭子が刑務所仲間の綾香の起こした事件を、地元新聞で調べるためにわざわざ東京から仙台へ出向き、愛子の図書館を訪ねる。綾香は愛子出身の設定になっているからだ。

粉雪交じりの中、愛子駅からタクシーで5分もしないうちに図書館に着くが、図書館の司書から新聞は保存されていないので、市民図書館へ行くことを勧められる。芭子は愛子駅に引き返し、仙山線に乗り、市民図書館を目指す。そして仙台市内で、あの大震災に遭う話になっている。作者の乃南アサは、この小説の取材のために編集者と2人で仙台入りしたとき、大震災に見舞われている本のあとがきで「芭子の体験したこととしてこの物語に盛り込んである」と述べ、大震災に遭ったときの様子の一部を、こう描いている。

「…ごおっ、ごおっとおおと音は響き続けている。あまりにも長すぎる。……激しい振動は、止まらない。ぐおおん、ぐおおん、と地面そのものにぶん回されているようだ。―地球が割れる。今、自分が何を見ているのかも分からなかった。ただ、一人でいるのがたまたまなく恐ろしかった。」

(次頁につづく)

音の言葉に不安・恐怖感をあおられ、読者はあたかもその場所にいたような臨場感に包まれる。改めて作家の表現力のすごさに感心させられ、資料的価値に値するのでは、と思うほどである。芭子と綾香の関係を軸に描いたこの小説は、数年前にNHKでドラマ化されている。ドラマの中では大震災に触れていない。蛇足だが、罪を背負った人間の真実を描くには報道だけではなく、こういうドラマで社会に提起するのもテレビの大事な役割だと思う。

小説の中の愛子に在る図書館…、広瀬図書館に違いない。その広瀬図書館にはあしかけ20年ほどお世話になっている。リタイアし愛子の自宅に戻ってから頻繁に通うようになった。いつのまにか職員の顔ぶれも変わり、聞けば民間委託になったという。実は、本好きだった私は高校生のころ、卒業後の進路として当時、東京都世田谷区に在った図書館短期大学を選択肢に入れたことがある。進路は違ったが、本好きは変わらず、勤務先でも地元の図書館をよく利用してきた。

図書館を利用する一方で、買って読んでいたときもあつたが、年齢を重ねるうちに、たまっていく本の処分が気になり始めた。そうしたこともあり、数年前から買う本は控え、図書館利用に拍車がかかったというわけだ。平成26(2014)年3月31日現在の広瀬図書館の蔵書冊数は10万冊と聞く。見つからない本、新刊などはリクエストすると、取り寄せていただけるのでありがたい。

平成26(2014)年から「読書会」、「思い出アーカイブ」という新しい試みが始まった。不肖私も参加させていただき、今まで以上に広瀬図書館が身近に感じられるようになった。愛子地域の「知の拠点」として広瀬図書館が、ますます発展することを祈っている一人だ。